



## はじめに

真珠湾攻撃に始まる緒戦の勝利に、軍人、政治家はもちろん日本国民全体が沸き立ったが、冷静に敗北を予想した政治家がいた。近衛文麿である。

近衛は、1891（明治24）年10月、皇室に最も近い五摂家筆頭の家柄である近衛家に生まれた。早くから将来の首相候補として期待され、1937（昭和12）年6月に45歳の若さで初めて内閣を組織して以来、対米開戦直前まで、3度のべ2年9か月の長期にわたり首相を務めた。その間、対外的には、勃発した日中戦争への対応、日独伊三国同盟の締結、南部仏印進駐など、国内的には近衛新体制の樹立と、太平洋戦争への過程において重大な役割を果たした。

戦後は、政界に復帰し、憲法改正作業に着手したものの、1945年12月服毒自殺を遂げた。日本内閣史上自ら命を絶った首相は、近衛ただ一人である。

そこで本稿では、近衛にとって画期となった1941年の12月8日に焦点を当て、その前後の近衛の動向と自殺との関連について論じたい。

## 1 前史—近衛・ローズヴェルト首脳会談の模索—

日米関係は、日中戦争の長期化とそれにとまなう東亜新秩序声明の発出、三国同盟締結をへて、悪化の一途を辿っていた。さらに1941（昭和16）年7月下旬の日本軍の南部仏印進駐は、近衛の楽観的な予想に反して、米国側の在米日本資産の凍結と対日石油全面禁輸という強硬な反発を招き、戦争の危機が高まっていた。

この行き詰まりを打開する策として近衛が構想したのが、フランクリン・ローズヴェルト大統領との日米首脳会談である<sup>1</sup>。発端は内閣書記官長の富田健治による進言で、近衛は、「陛下より全権を委任されて、アメリカですべてを大統領と直接談判で決めてくる以外、途は残されていませんね」と、晴れ晴れとした顔つきで賛意を表した。すなわち、会談では、「会見地から直接、陛下に電報で御裁可を乞い、調印するという非常手段」まで考えられていた<sup>2</sup>。

日頃から暗殺に敏感であった近衛が、命を惜しまず勇気をもって決断したものであった。その情熱は、「御学問所において内閣総理大臣近衛文麿に謁を賜い、日米首脳会談の実現に向けた決意につき奏上を受けられる」（8月6日）との『昭和天皇実録』の記述が、如実に物語っている<sup>3</sup>。

近衛が山本有三に起草を依頼した会談に際して発表される首相声明文案は、「誤解と感情と、第三国の策動とによって、太平洋を射的場とするやうなことがあっては、この大洋を挟む両大国は、世界史の上に、心にも

<sup>1</sup> 首脳会談の全般については、須藤眞志『日米開戦外交の研究—日米交渉の発端からハル・ノートまで—』慶應通信、1986年、183—235頁を参照。

<sup>2</sup> 富田健治『敗戦日本の内側』古今書院、1962年、169、172—173頁。

<sup>3</sup> 宮内庁『昭和天皇実録 第八』東京書籍、2016年、450頁。

ない汚点を残すことになる」と、切実に戦争の回避を訴えかける内容であった。さらに、「私は腹を割って、平和と人道のために語り合ひたいと思つてゐる。私の信念は、率直にして賢明なるアメリカ国民にも、必ず通ずるものがあると信じてゐる」と記されていた<sup>4</sup>。米国の国内動向及び厳しい国際情勢に対する認識の甘さが見られるものの、戦争回避に賭ける近衛の心情を如実に示している。1934 年、米国のハイスクールに留学している長男文隆の卒業式出席のため訪米した折、ローズヴェルト大統領と会見したことも、近衛の記憶の中にあつたのかもしれない。

ローズヴェルト大統領も、会談の場所はハワイは地理的に不可能であるからアラスカのジュノーあたりで、10 月中旬ごろではどうかと、一時乗り気であつた。近衛自身も、「恐らくこの時が日米の一番近寄つた時であつたかも知れない」と回想している<sup>5</sup>。

事実、政府は首脳会談のための随員や派遣する軍艦の準備に着手していた。会談期日は 9 月 21 日から 25 日まで、場所は公海上の軍艦とする方針も概定した。軍艦は「新田丸」が用意され通信機材も積み込まれ、護衛の第五戦隊を待機させた。首席随員は、外務省から重光葵大使、陸軍から土肥原賢二大将、海軍から吉田善吾大将が内定しており、錚々たる顔ぶれである<sup>6</sup>。

当時大本営陸軍部作戦課に勤務していた瀬島龍三（大尉）は、田中新一作戦部長（少将）から極秘裏に、中国戦線から兵力（約 85 万人）を撤収する作戦の起案を命ぜられたという。瀬島は、「現業部門の僕らは、全面的に期待したわけではないが、戦争にならずに別の道が開けるかも、とほつとした」と回想している<sup>7</sup>。

しかし、最終的には、先ずは事務的に詰めるべきとの原則論に拘つた米国側の拒否によって、実現するには至らなかつた。

首脳会談実現に向けて近衛と極秘に話し合つていたジョセフ・グルー駐日大使は、近衛が首相を辞した直後の 1941 年 10 月、近衛に書簡を送り、日米交渉における尽力を、「長い、難渋な、この上もなく抜群な公的奉仕」と見做し、「最高の敬意と私的な尊敬の意」を表していた<sup>8</sup>。

さらにグルー大使は、「彼一人だけがエンジンを逆転させようと試み、生命を賭け、事実紙一重のところまでいきながらも、一生懸命に、勇敢にそれを行」い、「日本を米国との友情の新しい方向に進ませることにつとめた」と、近衛を称賛していたのである<sup>9</sup>。

その後も日米交渉の進展は見られなかつたため、近衛は、交渉の打ち切りを主張する東条英機陸相と対立し、10 月 16 日総辞職するに至つた。

両者の会談では、東条陸相が「人間、たまには清水の舞台から目をつぶって飛び降りることも必要だ」と発言したのに対して、近衛は「個人としてはさういふ場合も一生に一度や二度はあるかも知れないが、二千六百年の国体と、一億の国民のことを考へるならば責任の地位にあるものとして出来ることではない」と反論した。さらに東条は、近衛の議論は日本の弱点を知り尽くしているから悲観的過ぎるのであり、米国にも米国の弱点

<sup>4</sup> 「幻の『近衛－ローズベルト会談』 山本有三氏起草の首相声明文発見 昭和 16 年夏」『産経新聞』1996 年 12 月 8 日付朝刊。

<sup>5</sup> 後醍醐院良正編『失はれし政治 近衛文麿公の手記』朝日新聞社、1946 年、108－114 頁。

<sup>6</sup> 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営陸軍部大東亜戦争開戦経緯 <4>』朝雲新聞社、1974 年、455 頁。加瀬俊一『日本外交史 第 23 巻 日米交渉』鹿島研究所出版会、1970 年、190－191 頁。

<sup>7</sup> 「『近衛・ローズベルト会談』 山本有三氏の草稿見つかる 意思疎通に厚い壁」『産経新聞』1996 年 12 月 8 日付朝刊。

<sup>8</sup> ジョセフ・C・グルー（石川欣一訳）『滞日十年 下』ちくま学芸文庫、2011 年、262－263 頁。

<sup>9</sup> 同上、298－299 頁。

があると主張し、最後は、「これは性格の相違ですなあ」と感慨を込めて語った<sup>10</sup>。

総理秘書官の細川護貞などによると、総辞職の二日前の 14 日の夜も、一睡もせずに開戦回避を思案し、その一案として、クリッパー機で米国に「脱出」して、ローズヴェルト大統領と直談判することなども真剣に検討していたという<sup>11</sup>。

さて、日米首脳会談が実現していれば、その後の展開はどのようになっていたであろうか。当時の国際情勢や日本の陸軍の主張などから、合意に達することは困難であったと思われる。但し、仮に合意が得られなかったとしても会談の開催により時間稼ぎになり、日米開戦の時期が遅れ、独ソ戦の戦局の変化もあって、日本は容易に開戦できなかった可能性が高い。まさに真珠湾攻撃の日の前後に、モスクワ前面でソ連軍が全面的な反攻に出たためドイツ軍は初の退却を余儀なくされ、ヨーロッパの戦局は一大転換点を迎えていたのである。

## 2 対米開戦と近衛

こうして日本は、12月8日を迎える。真珠湾攻撃をはじめとする緒戦の勝利により、日本中が沸きあがった。去る1月に逝去したノンフィクション作家の半藤一利（当時11歳）は、「なにかこう頭の上を覆っていた雲がぱあーと消えたような、晴れ晴れした気持ちをもったことを覚えています。日本人ほとんどがそう感じたと思います」と回想している<sup>12</sup>。特に、知識人は歓喜して迎えた。例えば、同年詩集『智恵子抄』を出版した高村光太郎は、12月8日に大政翼賛会中央協力会議に出席していたが、「十二月八日の記」において、「頭の中が透きとほるやうな気がした。世界は一新せられた。時代はたった今大きく区切られた」と記している<sup>13</sup>。

評論家の竹内好は、「支那事変に何か気まずい、うしろめたい気持があったのも今度は払拭された。・・・これを民族解放の戦争に導くのが我々の責務である」と、真珠湾攻撃直後の11日の日記に記していた<sup>14</sup>。

知識人の多くは、4年間の泥沼に陥っていた同じアジア民族の中国との戦いの意味をめぐって苦悩していただけに、米英との戦争には大義を見出すことが出来たと言えよう。

『朝日新聞』も、12月9日付夕刊（8日夕発行）の「帝国の対米英宣戦」と題した社説は、「宣戦とともに、早くも刻々として戦捷を聞く。まことに快心の極みである。・・・いまや皇国の隆替を決する秋、一億国民が一切を国家の難に捧ぐべき日は来たのである」と主張していた。

一方、近衛は、12月8日運命の日に、箱根湯本に滞在していた。午前6時過ぎ、ラジオや同盟通信社からの電話で対米開戦の一報を知り、驚愕するとともに怒り、近衛には珍しく狼狽したという<sup>15</sup>。急ぎ車で上京することにして、小田原で知人の内田信也（元鐵道相、のち農商相）と合流した。その車中で、近衛は内田に、以下のように語った<sup>16</sup>。

「今朝はハワイを奇襲した筈だ（引用者注：この時点ではまだ、「西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり」としか報じられていなかった）。僕の在任中山本五十六君を呼んで、日米戦について意見を叩いたところ、彼は初めの一年はどうか保ちこたえられるが、二年目からは全然勝算はない。故に軍人としては廟議一決し宣戦の大命降れば、ただ最善を盡して御奉公するのみで、湊川出陣と同じだ、とって

<sup>10</sup> 後醍醐院編『失はれし政治』131-133頁。

<sup>11</sup> 細川護貞『細川家十七代目』日本経済新聞社、1991年、70頁。高村坂彦『真実の上に立ちて一戦争と占領時代一』白文堂、1954年、52頁。岡義武『近衛文麿一「運命」の政治家一』岩波新書、1972年、191頁。

<sup>12</sup> 半藤一利『昭和史 1926-1945』平凡社ライブラリー、2009年、394頁。

<sup>13</sup> 『高村光太郎全集 第6巻 増補版』筑摩書房、1995年、295-300頁。

<sup>14</sup> 竹内好『竹内好全集 第十七巻』筑摩書房、1982年、299-300頁。

<sup>15</sup> 岡『近衛文麿』194頁。

<sup>16</sup> 内田信也『風雪五十年』実業之日本社、1951年、296頁。

おったが、山本君の気持としては緒戦に最大の勝利をあげ、その後は政府の外交手腕発揮に待つというのが心底らしかった。それで山本君はそれとなくハワイ奇襲を仄めかしていたんですよ」

近衛と山本の会談はのべ3回行われたとされるが<sup>17</sup>、山本との会談を通して、近衛は対米開戦回避、さらにやむなく開戦した場合の早期和平の必要性を確信したことは想像に難くない。内閣書記官長の富田によれば、近衛が対米開戦を避けるべく日米交渉に尽力したのは、感情でも意地でもなく、「到底勝ち目のない日米戦争の最後は、日本の悲惨な、徹底的な敗北以外ないことをおそれた」ためであった<sup>18</sup>。

東京到着後、華族会館（現在の霞会館）において、近衛は、訪問してきた総理秘書官の細川護貞に対して、浮かぬ顔をして、「えらいことになった。僕は悲惨な敗北を実感する。こんな有様はせいぜい二、三カ月だろう」と沈痛な顔をして、開口一番語ったという。さらに、「この戦争は負ける、どうやって負けるかお前はこれから研究しろ、それを研究するのが政治家の務めだ」と話した<sup>19</sup>。

その後、勝利が続くなか、開戦に反対し内閣を退いたことに対して近衛を批判する声が高まったため、12月16日近衛は木戸幸一内大臣に、華族の地位と名誉を放擲して公的活動から身を引きたいと洩らし、木戸は「それは餘にも軽率ではないか。戦争の見透しに楽観主義は禁物だ。私は貴君が再び努力すべき時機が必ず来ると思う」と慰留していた<sup>20</sup>。

年が明けて1942（昭和17）年元旦、近衛は年賀式のため宮中に参内した。そこでは、例えば開戦に反対であった岡田啓介元首相（海軍大将）でさえ、大変な勢いで、「山本（五十六連合艦隊司令長官）はやっぱりえらいよ。末次（海軍大将）でも、真珠湾攻撃をやらせたら、航空母艦は少しは残しておいたろうに」と語るなど、「真珠湾攻撃礼讃で持ち切り」であった。さらに、枢密顧問官の長老から、この戦勝の栄誉を近衛に担わせたかったが、惜しいことをしたと言われたのに対して、近衛は絶句し、「あの老人連までもやはりこのまゝ勝つと信じているのですか。来年の年賀式には何んと僕に挨拶することだろう」と洩らし、現在のような状況は今後1年も続かないと断言したという。この日の様子について、近衛は、「不愉快でしたな。低級ですね。この調子じゃ、最後迄行ってしまうかも知れませんよ」としみじみと語った<sup>21</sup>。

1942年2月シンガポールが陥落した際、近衛は親しい知人と戦局について議論し、「勝った、勝ったと言っているが、マライや南洋人を相手に勝っているだけのことで、これに負けでもしたら、それこそ大変じゃないですか、まるで赤児の手をもぎとって喜んでいようなもので、こんなことは問題ではなく、これから後が果してどうなるかということが問題なんです」と言い、軍や企画院に散見される楽観論に反論した。その後も、近衛は側近に、このままでは日本は、日清戦争前の状態に逆転すると指摘していた<sup>22</sup>。

### 3 戦中の近衛

開戦以降、近衛は、戦争の回避に尽力したことから、緒戦の勝利に酔いしれる国民から、「敗北主義者」、「憶病者」、「卑怯者」などと軽蔑、嘲笑され、孤独にさいなまれる日々を送っていた。一方、戦争非協力者として

<sup>17</sup> 両者の会見について詳細は、「検証近衛文麿・山本五十六会談」『軍事史学』第49巻第1号（2013年6月）を参照。

<sup>18</sup> 富田『敗戦日本の内側』207頁。

<sup>19</sup> 細川護貞「近衛公の生涯」「近衛日記」編集委員会編『近衛日記』共同通信社、1968年、150頁。同「元老・重臣の動き」『語りつぐ昭和史—激動の半世紀（3）』朝日新聞社、1976年、304頁。

<sup>20</sup> 矢部貞治『近衛文麿』読売新聞社、1976年、667頁。木戸幸一『木戸幸一日記 下巻』東京大学出版会、1966年、934頁。

<sup>21</sup> 富田『敗戦日本の内側』208頁。内田『風雪五十年』296—297頁。

<sup>22</sup> 木倉幾三郎『近衛公秘聞』高野山出版社、1950年、86—90頁。矢部『近衛文麿』667頁。

軍からにらまれ、憲兵の監視を受けていた。

米機動部隊による初めての日本本土空襲（「ドーリットル空襲」）が行われた 1942（昭和 17）年春頃、近衛は、今度の空襲は、「戦争ヲ甘ク見テ居タ人々ニ意外ノコトデアル・・・シカシ私ニ言ハスレバコンナ事初メカラワカッテ居タコトデアッタ何モ今更驚クニ当ラヌ ソレガ嫌ナラ戦争ナド初メヌガヨイノダ」と心境を記している<sup>23</sup>。

戦争末期には、「自分のみ憂国の士と思ふらし思ひ上られるかの人々は」、「かの人等つひにここまでこの国を引きずり来し恐ろしきかな」、「米英を人は鬼畜に譬へけりかの人々を何にたとへむ」と、痛烈に軍や政治家を批判する和歌を遺していた<sup>24</sup>。「かの人々」、「かの人等」は、主に軍を指している。

一方、開戦当日、いかに負けるかを研究するのが政治家の務めだと言っていた近衛は、早速開戦の翌月 1942 年 1 月木戸内大臣に、戦争終結の時期を早急に検討すべきであると強調、それを受けて、木戸は 2 月 5 日天皇に拝謁、「大東亜戦争は容易に終結せざるべく、結局建設を含む戦争を徹底的に戦ひ抜くのが平和に至る捷徑なると共に、一日も早く機会を捉へて平和を招来することが必要」と上奏している。さらに、天皇は、12 日東条英機首相に、「戦争終結につきては機会を失せざる様十分考慮し居ることとは思ふが、人類平和の為にも徒に戦争の長びきて惨害を拡大し行くは好ましからず」と述べていたのである<sup>25</sup>。

戦局の悪化にともない、近衛は再び政治舞台に登場し、1943 年夏頃から岡田元首相など重臣とともに、早期平和を目指して活発に終戦工作に着手していく。まずは、東条内閣の打倒を画策、サイパン島陥落を契機に、1944 年 7 月東条内閣は総辞職に追い込まれた。

1945 年 2 月、天皇は 7 人の重臣から意見を聴取、近衛は 14 日に上奏（「近衛上奏文」）を行い、「国体護持」のためにも一日も速やかな戦争終結が必要であると早期平和を訴えた<sup>26</sup>。

さらに、米軍の本土上陸が迫っているとの情報を得て事態を憂慮していた近衛は、ナチスの副総統ルドルフ・ヘスのように、例えば軍の了解の下フィリピンでも捕虜となり米国に密航して、日米交渉末期に構想したのと同様にローズヴェルト大統領との直接会談を模索することまで考えていた<sup>27</sup>。また、適切な手を打たなければ日本は滅亡するだろうと真剣に考えて、「沖繩近海を漁船で漂流して、わざと米軍の捕虜になり、ワシントンに乗り込むチャンスをつかんでやろうというほど、思い詰めていた」という<sup>28</sup>。

その後日本は、ポツダム宣言の受諾をめぐる、政府部内では最後の段階においても混迷・動揺が見られたが、近衛を中心に高松宮や重光葵らの尽力により、1945 年 8 月 15 日終戦を迎えることになる。例えば近衛は、内閣がポツダム宣言受諾を決めた 14 日朝、側近を通じて鈴木貫太郎首相に、「此の際形式と文字に拘泥せず、大局より国家を救ふべき」との書簡を提出し、ポツダム宣言の即時受諾を強く要請していた<sup>29</sup>。

## おわりに

終戦後近衛は、東久邇稔彦内閣の国務相（無任所）、ついで内大臣御用掛として、ダグラス・マッカーサー

<sup>23</sup> 「近衛文麿公の遺稿」（陽明文庫所蔵山本有三蒐集近衛文麿公資料）。

<sup>24</sup> 杉森久英『近衛文麿』河出書房新社、1986 年、512-513 頁。

<sup>25</sup> 木戸日記研究会編『木戸幸一関係文書』東京大学出版会、1966 年、43-45 頁。

<sup>26</sup> 近衛上奏文の詳細については、庄司潤一郎「『近衛上奏文』の再検討—国際情勢分析の観点から—」『国際政治』第 109 号、1995 年 5 月を参照。

<sup>27</sup> 細川護貞『細川日記』中央公論社、1978 年、340 頁。加瀬俊一『ミズーリ号への道程』文芸春秋新社、1951 年、281 頁。

<sup>28</sup> 細川『細川家十七代目』89 頁。

<sup>29</sup> 細川『細川日記』428 頁。

連合国最高司令官と二度にわたり会見するなど、憲法改正の作業に着手した。しかし、その後、近衛の戦争責任を追及する論調が新聞に散見され始め、近衛に対する批判が国内外に普及していった。ついに、GHQ（連合国最高司令官総司令部）は 1945（昭和 20）年 11 月 1 日、近衛の憲法改正作業と GHQ とは無関係であるとの絶縁声明を突然発表した。

こうしたなか、近衛は 11 月 27 日軽井沢の別荘に赴き、朝日新聞社の小坂徳三郎を招いて、これまで断片的に書き留めていた覚書をもとに口述を行い、「余の政治的遺書」である手記をまとめた<sup>30</sup>。

ついで GHQ は、12 月 6 日近衛らに逮捕指令を発したのである。それから 2 日、開戦の日から丁度 4 年後の 1945 年 12 月 8 日を、軽井沢に滞在中の近衛は、41 年とは異なった意味で失意のなかで迎えたのであった。

11 日夜軽井沢を発ち上京、出頭日である 12 月 16 日の早朝、近衛は、「荻外荘」（荻窪の自宅）において青酸カリで自殺を遂げたのである。享年 54 歳であった。

遺書には、「僕は支那事変以来多くの政治上の過誤を犯した。之に対して深く責任を感じて居るが、所謂戦争犯罪人として米国の法廷に於て裁判を受ける事は堪へ難い事である。・・・此解決の唯一の途は米国との諒解にありとの結論に達し、日米交渉に尽力したのである。その米国から今犯罪人として指名を受ける事は、誠に残念に思ふ」と記されていた。

このように近衛は、多くの政治的過誤を犯したと認めていたが、主な戦争責任は陸軍にあり、戦争の回避と終戦に尽力した自身が指定されるとは考えていなかった<sup>31</sup>。したがって、戦後政界に復帰し、憲法改正などに活発に取り組んだのである。

近衛が、戦前は対米開戦の回避、開戦後は早期和平に献身した数少ない政治家の一人であることは否定し得ないであろう。確かに、東条内閣打倒そして終戦は、近衛の存在なくしてあり得なかったと言っても過言ではない。

一方、日中戦争の拡大、三国同盟、仏印進駐など日米交渉の原因を生み出した事案の多くは、近衛内閣のもとで実施されたのであった。自身が生み出した結果生じた日米関係の悪化に、日米交渉という最後の局面において尽力したものの戦争回避に失敗したのであった。

近衛自身は日米交渉など戦争の回避に尽力したと強く自覚していたのに対して、一方 GHQ は、そのことよりも、戦争に至る近衛内閣期になされた数々の政策決定を問題視したのであった。このギャップが、近衛の自殺をもたらしたと言えよう。

(2021 年 12 月 6 日脱稿)

## プロフィール

profile

### 研究幹事

庄司 潤一郎

専門分野：近代日本軍事・政治外交史、  
歴史認識問題

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。  
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。  
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29177）

F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>

<sup>30</sup> 後醍醐院編『失はれし政治』に収録されている。

<sup>31</sup> 柳澤健『故人今人』世界の日本社、1949 年、39-40 頁。